鑑賞文　短歌を楽しむ (2)

　しかし、明治の文明開化が進み、近代化の波は詩歌の世界にも次第に押し寄せてきます。そんな明治二十年代から三十年代にかけて、与謝野鉄幹や正岡子規が和歌革新運動の旗を掲げて活動を始めます。

　与謝野鉄幹は、明治二十九（一八九六）年刊行の詩歌集『東西南北』の序文で「小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ」（私の詩や歌は、すなわち私のものです）と書き記しました。現代の私たちから見ると全く当然の宣言なのですが、伝統と形式でがんじがらめになっていた当時のことを考えると、①これがいかに画期的な決意であったか、わかってもらえると思います。

　春の桜をうたい、秋の名月をうたい、若々しい恋をうたう。そういった場面場面で、もう旧来の和歌の教養に縛られることなく、自分だけの率直な思いを表現することに全エネルギーをかけようとしたのです。

　正岡子規も同様に、新しい時代には発想の転換が必要である、と考えた人物でした。子規の斬新なところは、これまでの和歌では高尚なものしかうたわれる対象にならなかったのに対して、身の回りのどんなささやかなものでもうたってしまおう、と挑戦したことでした。

B　人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蝿殺すわれは

正岡子規『竹の里歌』

歌の意味は〈人々が皆、箱根や伊香保へ遊びに行く日も、私は粗末な家に籠って蝿を殺しています〉。

蝿などという可愛気のない虫が出てきますし、しかもその蝿を「殺す」とうたっているのですから、美的表現とは程遠い歌です。

　子規は三十六歳で亡くなっていますが、亡くなる前の数年間は脊椎カリエスのため寝たきりの生活を送っていました。病床の限られた空間だけが自分の宇宙だった子規には、蝿を叩き殺すことも日々の大切な日課だったのかもしれません。

　絵空事の恋や花鳥風月をうたうよりも、蝿の歌の方がずっと自分らしい歌になっている。②きっと子規は誇りを持って蝿の歌を作ったのだろうと思います。

（中略）正岡子規たちの革新運動のお陰で、和歌はずいぶん日常的で親しみやすいものになりました。和歌から短歌への変化は、肩の凝るよそ行きの衣服を脱いで、お気に入りの普段着に着替えるような開放感、と言ってよいでしょう。また、開放的ではあるけれど、短歌には定型という決まりがあるため、適度の緊張感があります。普段着だけれどルーズになりすぎないのですね。そのことも、短歌で日々の思いを表わすときの安心感に繋がっています。

（栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「これがいかに……思います」とあるが、与謝野鉄幹の宣言は何が画期的だったのか。適当なものを選びなさい。

ア 詩歌が伝統と形式で縛られたものだった時代に、旧来のものに縛られずに自分の率直な心情を表現しようとしたこと。

イ 現代から見ると当然の宣言のように見えても、明治時代の当時にあっては意図が伝わらない難解なものだったこと。

ウ 春の桜や秋の名月、若々しい恋といった、旧来の伝統的な和歌でうたわれた場面を詩歌にしないと宣言したこと。

〔　　〕

(2) Bの歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 旧来の和歌では対象となることがなかった、身の回りのささやかなものをうたったことが斬新である。

イ 美的表現とは程遠い内容であり、高尚なものばかりうたっていた旧来の和歌にはないものである。

ウ 新しい時代の和歌にふさわしく、自分の日常を離（はな）れた世界の出来事を表現しようとしている。

〔　　〕

(3) ――線②「きっと子規は……思います」とあるが、筆者はなぜこのように考えるのか。適当なものを選びなさい。

ア 和歌革新運動を起こしていた子規にとって、蝿の歌は旧来の和歌になかったものを無理に歌にしたものだから。

イ 病床で過ごしていた子規にとって、蝿の歌は自分の過ごす日々や思いが表現された自分らしい歌だから。

ウ 明治時代に生きた子規にとって、蝿の歌は近代化された日本の風景が描写（びょうしゃ）された新しい時代の歌だったから。

〔　　〕